
心拍数 < 深海魚3 >

イノル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心拍数 <深海魚3>

【コード】

N1034U

【作者名】

イノル

【あらすじ】

ノベル「深海魚」の3作目になります。そちらから読まれると、より判りやすいかと思います。

普通の学校生活。ひさしぶりの平和な生活。だって、薫は夏休みはずっと施設の手伝いをしていたから。それを終えた薫に待っていたのは、親友素子からのとんでもない質問。

「ねえ、槇野さんときあってるって、ホント？」

はあ！？あんな、ひねくれ者で、意地悪で、態度が悪くてのカヲルと！？

ゆらゆら揺れる女心、そしてカヲルの夢を覗いてしまった罪悪感、親友素子の事件。深海魚、完結。

夢のはなし

夢の話をしようか。

夢というのは、目指したり、目標にしたりの夢ではない。眠るときに見る、あの夢。

人間はレム睡眠とノンレム睡眠を交互にくりかえしているという。深い眠りと浅い眠り。その浅い眠りの時に人は夢を見るのだという。それを覚えているか、忘れてるかそんな違い。人は必ず夢を見るのだと聞いた事がある。

俺の名前は槇野カヲル。その夢を渡り歩く人間。

俺の中での夢とは、そう、例えるならば宇宙空間を泳いでいるかのような感覚に近い。

人々は境界のぼやけた世界で夢を見ている。軽かったり、重かったり、淡いものもあれば、濃度の濃いものもある。さらには、まれに重なっている場合もあったりする。そんな時は、まあ親子が多いのだろうが、同じ夢を見ている状態に近いかもしれない。

様々な夢が、俺の周りを囲んでいる。俺はその中に入り込む事が出来る。

生まれつきの能力だ。小さい頃は勝手に入り込んで、他人の夢を眺め見る事もしていた。眺める事自体は、その人間に対しての影響はある場合もあるし、無い場合もある。

ただ、昨日見た夢をズバリ言い当てられるのは、気持ちのいいものじゃないだろう。はつきり言って気味が悪い。それを気付くのにどれだけ時間がかかったか。俺は他にもちよつとした特殊な能力も持っているので、気味悪がられ、拒否され、さらには親に捨てられ、

人に嫌われ生きてきた。

だから、俺はその夢の狭間の空間に、自分だけの世界を作った。いわゆる、これが俺の中の夢ということになるのかな。

六畳くらいの、ボロボロアパートの一室。なんとなく、俺自身みたいで気に入ったりもしていた。ソファとテーブルだけがある、そんな部屋。

そこなら人々の夢を遠ざけることもできる。

あまりにも強烈な夢は、窓の近くにまで来てしまう事もあるが、その部屋から出なければ俺には影響が無い。

そうやって、他人の夢に接触するのを回避してきた。

ところがだ。

どこかの誰かさんは、感受性が強いのか知らないが、俺とは違う方法で他人の夢に入り込んでしまう。そして、その夢の住人の気持ちを知ると、放っておけないらしい。

前回など、鬱の子の夢に感化されてしまって、危うくそいつまで鬱になりかける始末だ。さらには無茶な事に、その子を助けたいとまで言いだした。

ちなみに夢は住んでいる距離など関係ない。

たまたま、その時は近所の人間だったから良かったようなものの、これが海外だとかになったらどうするつもりだったのかね。

ま、その根性は認めるが。

俺が何を言いたかったかというのは、俺の夢の世界を知ってもらいたかったっていうのと、そいつが、どうやったかは知らないが、俺の狭間の空間にまで押しかけてきたってことだ。

俺だって、熟睡する時もあるれば、ボロボロアパートでぼーっとしてる時もあるさ。

ちよっと他人が夢の中に入られるのを嫌がるの気持ちがあったような、そんな気分。

そんなところかな。

そもそも最初に狭間に連れて行ったのは、俺だしな。文句も言えないか。

あの、おせっかいな奴は今、どうしているのかね。

……ああ、そろそろ時間だ。起きないと。

そう言つと、槇野カヲルはボロボロのソファから立ち上がり、所々剥がれた床のパネルを蹴りながらドアの外に出た。

すると、まるで泡かのように、そのアパートは消えていく。

世界は乳白色に包まれている。夢たちは、淡く、薄く無くなったり、弾けるように消えていく。その世界をカヲルは上を目指して歩いていくのが見えた。

朝が来たのだ。

1 無日常

二宮薫は友人の素子と一緒に、大学のキャンパス内にある中庭の芝生の上でお弁当を食べていた。

空は秋の気配がだんだん色濃くなっていき、風も湿気を失いさらりと流れている。空は蒼く澄み切っていて心地がいい。夏は終わったが、もうすぐ大学の学祭もあるので、大学内もなんだか皆そわそわしているように見えた。

平和だなー。と、薫は一人でその秋の空を見上げながら考えていた。

今年の夏は休みだった気がしない。

何故かといわれれば、榎野カヲルという同じ大学の男の人と一緒に、保護施設の子供たちと生活をしてきたからだ。だから肉体的にも精神的にも休んでいたという気にはなれなかった。でも、楽しかったし、おかげで色々な事を知る事が出来たりもしたのだが。

色々な事……。心の事、カヲルの事。

しかし、カヲルは相変わらずの態度なので、彼を知ったと言えるのか、ちよつと疑問かも。

本当に大変な夏だった。だが、それも大学が始まってしまっただけなら、まるで夢であったかのように、平穏で静かな日々が続いている。

もちろん、今も施設にはちよくちよく顔をだしている。だが、院長や、保育士の人たちが復帰してからは遊びに行く程度のものだ。

カヲルともあれから顔を合わせていない。あのけだるい目の嫌味たっぷりでふりかけた男と顔を合わせていないだけで、こんなに静かだとは思わなかった。静か過ぎて寂しいくらいだ。

そして今、平和をかみしめている。

今度は薫が絶叫した。まあ、確かに男前ではあるとは思っていたけど、最優秀賞って。…の前にそんなのに出場する事自体がびっくりだ。確かあれって、自薦他薦あったよね。

「他薦ではあったけどね」

素子の目が好奇心でキラキラしている。人間の目というのは、こんなにも心の中を映し出してしまうのか。複雑な心境になりながら、薫はその目を見ながら思った。

「それって、出た事でなにかあるの？」

「うん、最優秀賞は賞金5万と食券1年分」

……それが目的か。カヲルは奨学金で入学しているから、万年金欠なんだよね。

薫はため息をついた。なにをやってるんだか。カヲルは。まあ気持ちにはわからなくもないけどさ。しかし、それでさらに最優秀賞っていうのはどうなんだろう……。

「だって、槇野さん、かつこいいし」

まあ、それは認めるよ？ でも、普段の行動と言動と態度が全然優秀じゃないんだけどなあ。

「髪型だってさ、常にお洒落だし」

薫は知っている。カヲルの髪型は一瞬パーマをあてているようにみえて、本当はくるっくるの天然パーマなのだ。朝見ると素晴らしく大爆発をしている。それを水で濡らして自然乾燥でハイ、終わり。都合のいい髪形だよな。

それに髪型は施設の女の子に必ず一人はいる、美容系の専門学校に行きたいと希望している子に切ってもらっているから、それなりの髪型で収まっているのだ。

「スタイルもいいし」

万年金欠で細いんです……。いざとなったら施設で食べてます。筋肉があるのは子供たちと暴れているからなんだよ……。

「無口でクールなイメージだし」

それはきつとメンドクサイだろうね。人としゃべるのが。

「オシャレだし」

オシャレ…かなあ？ 私はシャツ姿しか見ていないけど……？

「そのイメージ全て間違ってるよ。だって、槇野くん、意地悪だし、金欠だし、性格悪いし、態度も悪いし。もう、最悪だよ！」

そこまで一息で薫は叫んだ。だが、その反面素子にはやにやして
いる。

「それだけ知っているのはやっぱり、付き合っているからなんだろ
ーね。愛情の裏返してやつ？」

この誤解をどう解けばいいのだろうか、薫は頭を抱えた。こんな
ところで、こんなことになってるなんて思ってもみなかった。

あ、あるじゃないか。最も簡単な方法が。

「あのね、私たち幼馴染なんだよ。それで今年になって再会してさ」
「そうか！ それでまた、盛り上がっちゃったんだ」

駄目だ。何を言っても無駄だ。

薫は頭を振った。全身全霊をもつてしても、その噂は否定したい。
「皆で言ってたんだよ」。槇野さんみたいにレベルが高い人は、逆
に普通の子がいいのになって

え、ちよつとまつてよ。それって私がすつごい地味みたいじゃん。
「ふつうだよ。普通。槇野さんが目立ちすぎるだけ」
なんなのだろう、この負けた気分は。

ものすごく悔しい。なんでだ？ 確かに私は目立つ存在じゃない
けどさ。どこにでもいる大学生って感じだもんね……。

しょぼん、と薫は軽く落ち込む。

「すこかったんだよー、去年のコンテスト。槇野さんが遅れて出て
きたんだけど、即決だったんだもん。審査員女子全員が一斉に合格
！ って叫んでさ。面白かったよ」

ケタケタ笑いながら、素子はその時の状況を教えてくれた。
「合格ってなんだろうねえ」

この学園内の女子の見る目のなさに同情します。

そのうちの一人にされてる自分がなんか悲しい。とても悲しい。

「他の女子達に嫉妬を受けないように気をつけてねー」

素子は楽しそうに薫の肩を叩いた。完全にこの噂で遊んでいる。きつと今否定した事全て違う風に取り違えてまた話を盛り上げるつもりだ。

薫はお弁当を置いて、空を見上げた。

ああ、神様がいるのならば、このくだらない噂を一瞬で消す方法を教えて下さい。

薫の願いはむなしく心のうちで響くだけだった。

2 非日常

その噂が消える間もなく、薫はその日、図書室の準備室の前にいた。

この中に、例の槇野カヲルは居るはずなのだ。彼の安息の場らしい。まあ、どうせまた本をアイマスク代わりにして眠っているのだろうが。

変な噂を聞いたから、無駄に意識してしまう。違う、考えるな。今日は彼に用事があつて会いに來ただけなんだから。

ドアノブを掴む手が汗ばんでいる。薫はひとつ呼吸を整えると、そつとノブを引いた。

中はあいかわらず薄暗い。外は秋の空になつていて、日陰に入るともう肌寒いくらいだ。この中はさらにひんやりしている。一歩入ると、部屋の奥に人影が見えた。

居た。カヲルだ。

いつものように、足を無造作に机の上に投げ出して、器用に椅子を斜めに傾け（危ないので真似しないように）分厚い本を読んでいる。めずらしい。寝ていないなんて。

「ようこそ、いらっしやいませー」

どこかの居酒屋で聞いたことのあるような台詞を、本から顔を上げずに棒読みでカヲルは言い放った。

どういふ態度よ。まったく、もう。

まあ、とりあえずは入ってくるな、とは言われなかったので、静かにドアを閉めた。

なにやら真剣に本を読んでいる。遠目で背表紙を見てみると、心理学の本だ。何故だろう。彼は法学部のはずなのに。

しかも、彼が読んでいるのは、まだ心理学部の薫ですら読めていないレベルの高いものだ。かなり勉強しないと理解が難しいはずなのに。

「何か、用か？ 言っとくけどな、噂は俺のせいじゃないからな。噂を否定したいのなら、俺のところに来ると余計誤解されるだけだぞ？」

相変わらず本から目を離さない。しかしながら、カヲルのところにまで噂は広がっているのか。

「どうして、こんな噂が広がっちゃったのかな。カヲルくんもちやんと否定してよ？」

ぶつぶつ言いながら、薫は近くにあった折りたたみ椅子を広げて座った。

そして久し振りに見たカヲルの顔を覗き込んだ。

なんだか、痩せた気がする。それに目の下にクマなんかが出てくる。どうしたというのだろうか？ 人の倍以上寝ているイメージがあるのだが。

「施設に一緒に入っていく所を見られてたみたいだ。俺は別にどうとでもいいがな」

そこで、カヲルはやっと薫と顔を合わせた。

「何だよ。人の顔をじっと見やがって」

もうこの口調にも慣れた。薫はいつものお返しにと、わざと、にやにや笑いながら先ほど聞いた去年のコンテストの話を持ち出した。「カヲルくん、去年コンテストなんかに出てたんだねー。最優秀賞だった？」

カヲルはコンテストと聞こえた瞬間に、口をへの字に曲げ、眉をしかめ露骨に嫌な顔をした。そしてトゲトゲしい口調で思い出すように言った。

「学部の同じ男どもに、無理やり引っぱり出されたんだよ。いい迷惑だ。ま、おかげで飯代が浮いたがな」

眉が半分吊りあがった。そこまでこの話題を嫌がっている。よっぽど去年大騒ぎになったのだろう。ここまで露骨に表情に出すのは珍しい。面白がって薫はこの話の続きを言うことにした。

「今年も出るの？」

眉間のしわがますます深くなっていく。おお、こわ。

カヲルは返事をせず、そっぽを向いた。

「おまえのエントリーはしておいたぞ」

へ？

「二宮薫でエントリーしてやったぞ」

ええ？

なんだって！？

薫は慌てて立ち上がり、カヲルの肩を鷲づかみにした。

「ちよっ！ それっ！ 本当なの！？」

「うわっ！ ばっかやろう！！！」

カヲルは足を投げ出して、椅子を二本脚浮かせた状態で本を読んでいた。そこに薫が掴みかかったものだから、二人揃ってバランスを崩した。

結果、大きな音を立てて、カヲルと薫は重力に引かれて倒れていく。

埃が宙を舞う。

その埃にむせながら、薫は起き上がった。体勢的にカヲルの上に倒れこんでいる状態だ。こんな所を見られるから勘違いされるんだよね。

「ったく。本当だよ。おまえは俺の上に乗るのが、そんなに好きか？」

後頭部をさすりながら、カヲルは頭を上げた。薫が口を開いていないのに、どうして考えている事がわかるのか。

それが、槇野カヲルのもうひとつの能力。

人に触れると、その考えが流れ込んでくる。

それはどんなに恐ろしい事か。人の考えていることは、単純明快ではない。今の薫の考えなどはまだ気楽な方だが、人間の醜い心もカヲルは読んでしまう。

だが、大人になったカヲルは自分を制御して、自分で能力をコントロールできるようになった。意識を張り巡らせて、他人の思考を入り込ませないようにすることを可能にした。

しかし、ちよつと気を許すと、今のように流れ込んでしまう。

薫自身は全く気に留めてもないけれども。

幼い頃幼馴染だった二人。小さい薫は、カヲルに「嫌な事もわかっちゃうけど、きつと楽しい事もわかるはずだよ」と言ったらしい。本人は全く覚えていないのだが、その一言でカヲルは考え方を変える事が出来たそう。

この意識が流れ込んでくる能力と、夢の中に入り込む事ができる能力。そのせいで、カヲルはかなりの偏屈になってしまったが、この程度で済んでいるといえば、そうかもしれない。

ということを薫は一人の時、考えてみたりする。

「で、結局、今日はなんの用だ？」

椅子ごと倒れている状態のまま、カヲルは言った。（起き上がるなり、すればいいのに）

あ、そうだ。忘れていた。

「そう、用事があったのよ」

薫もカヲルの上に乗ったままで、今日遊びに来た用件を言った。

一体、この二人の関係は何になるのか。お互い慣れすぎているにも疑問が湧く。

2 非日常

どうして、こういう事になるのかなあ？

薫は疑問を拭えないでいる。そして包丁で野菜を刻んでいる。

どうして、私は今、包丁を握り締めているのだろうか。

しかも、自分の家で。

いや、それ自体は全くもって不自然ではない。

薫は母子家庭で育ったので、料理は得意だ。そして一人暮らししている今も、ほぼ毎日自炊をしている。もう慣れたものだ。

何を薫は疑問に感じているのか。

それは薫の部屋の奥に陣取っている、カヲルの存在を確認すれば、わかるだろうか。

薫のマンションは大学の女子寮になっている。とは言っても、別に管理人がいるわけでもなく、単にオートロックの普通のマンションである。その1Kの一室。

白と淡いピンクを基調とした部屋にカヲルの存在がどれだけ違和感か。さすがに、この部屋に今までカヲルを入れたことはなかった。別に恋人同士っていうわけでもないのだから。

それなのに、何故、今カヲルはここにいるのか。

そして、どうして、薫は包丁を握っているのか。

話は単純明快。

薫の母が、大量に野菜を送ってきたのだ。

保存するにしたって、この量はないだろう。一人暮らしの冷蔵庫がどれだけ小さいのか、母は知らない。おかげで送られてきた冷蔵庫に入りきれないダンボール一杯の山盛りの野菜たち。

薫の女友達たちは、残念ながら殆どの子が自炊が出来ない。皆で分けるとしても、きつと腐らせるだけだ。と、いうことで、万年金

欠、料理も出来るカヲルにおすそ分けをしようとしただけなのだ。

ただ、やっぱり大学に野菜を持っていくというのは気が引けるので、家まで来てもらって持って帰ってもらおうと考えたのだが……。何を考えたのか、カヲルは「ロールキャベツが食べたい」と言い出し、上手い事薫をおだて上げ、家に入り込んだのだ。

いや、確かにロールキャベツは冷凍庫に作り置きしていたのだが……。

だからって、何故私がカヲルの為に料理を作らないといけないのだ？

「おまえ、料理が上手いからなあ。」

そう言われると悪い気がしないのは、悲しい女の性というものでしょうか……。

ちよつとしんみりしてしまふ。とにかく、ロールキャベツを温め、さらに母に送ってもらった野菜を使い、コトコトと鍋で煮込んでしまふあたりが、手を抜けない薫の性格を表している。

部屋ではカヲルがTVなんかをのんびり見ている。なんとも違和感な光景。

「はい、出来たよ」

ローテーブルの上に、トマトベースのソースをかけられたロールキャベツに、ポトフ、さらには温野菜サラダが並べられた。

温かい湯気が立ち上っている。

あのカヲルが、おおっ、という驚いた顔をしている。

なんだか、やった！ って気がした。カヲルを驚かせるのが、あの意味快感になってきた。

「施設で作ってた、おまえの料理、美味かったもんな。さすがガキどもが作る料理とは違うな」

「感謝をして食べなさい」

誉められたので、偉そうに言ってみた。するとカヲルは珍しく薫にナムナムする仕草を見せ、（どうやらお祈りのつもりらしい）勢い良く食べた。

うつむ。美味しそうに食べるなあ……。

何か難癖をつけようと思っていた薫だが、そう美味しそうに食べられると、なにも言えなくなる。仕方なく、薫は向かい側と一緒に食べた。

会話はもっぱら施設の子供たちの話になってしまふ。なかでも、その施設に住んでいるりえと、その友達の綾の話だ。

「綾ちゃん、リストカット止めれたかなあ」

もぐもぐと料理を口に含みながら、カヲルに聞いてみた。

「りえからは、大丈夫みたいだ。と聞いているがな。まあ何かあったら、あいつらで何とかするだろう。もう中学生だ」

施設では中学生あたりになると、もう大人扱いされるらしい。

だからだと会話は続き、食事を終わると、薫は食器を洗いにキッチン兼廊下に立った。

「俺がやるよ」

とカヲルは言ったのだが、1Kのキッチンなど、ろくに食器を置く場所など無い。自分のルールにのっとって手際よく片付けないと置き場所に困るのだ。

せっかくのカヲルの言葉だが、薫は自分でする事にした。

ふと振り返ると、カヲルがベットの角を利用して、うとうとしてる。眠そうな表情。

なんだか、今日は意外なカヲルを見ているな。大丈夫？ と聞いてみた。

「最近、眠れないんだ。悪い、一時間ほど場所貸してくれ」

器用にベットの角を枕にしてフローリングの上で伸びている。そのちょうど足元に勉強用の机があった。薫はこの後そこでレポートを仕上げようと思っていたのだが……。

よっぽど睡魔に襲われているのだろう。このまま帰しても、道路で寝てしまいそうな勢いだ。しかたないなあと薫は思った。

「ベットの上、貸してあげるから、場所移動してほしいな」

その言葉に、すでにむにやむにやと力が抜けているカヲルは、の

っそりとベットの上に転がった。そして幾分も経たないうちに、寝息が聞こえてきた。

よっぼど、眠かったんだね。

毛布をカヲルの上に掛けてあげて、薫は机の上に向かった。

「あ、こんな時間」

レポートに気を取られていて、気が付いたときには一時間半過ぎていた。

さて、カヲルを起こさないで。

振り向いてカヲルのいるベットのほうに身体を向けた。カヲルは熟睡……いや、爆睡といったほうがいいのか、微動だにせず、眠っていた。

「ほら、カヲルくん、時間だよ」

カヲルを揺さぶる。だが、全くもって起きる気配がない。

「カヲルくんってば」

さらにカヲルを揺さぶる。ううん。という言葉が漏れてきたが、目を開く様子も無い。

どうしたらいいのだろうか。

今までこういう経験が無いだけに、薫には起こす術を知らない。

焦って、何度も揺さぶっていた時だった。

「あー！」

カヲルが薫の腕を掴み、引っぱり込んだのだ。

本日二度目のバランスを崩して、薫はベットの中に連れ込まれてしまった。

え、えーーーーー！

カヲルの腕はがっちりと薫の肩を抱え込んで離さない。暴れてみようとしたが、全く動くことすらできない。

こ、これは……。
もしや、

抱き枕状態ってやつですか!!!!?

カヲルの鼓動が聞こえる。綺麗な顔面が直ぐ傍にあった。薫は顔を真っ赤にさせた。カヲルとは顔を接近したことは何度もある。だが、今回のように無法備なカヲルに接近というか、見た、というか、こんな状態になったのは初めてだ。

客観的に見たらカヲルに抱きしめられているとしか見えない。いや、客観的ではなくてもこれは抱きしめられている。

「カヲルくん、カヲルくん！ 起きてよ！」
こうなれば、叫ぶしかない。

薫は体を左右に揺らし、足をバタバタさせて、大きな声で叫んだ。カヲルは薫を抱え込んだ状態だ。そこで耳元で叫ばれたら、嫌でも起きるだろう。

「……うるさいな……」
そこでやっと切れ長の目がびくびくつと痙攣をおこし、開いた。そして、この状況を確認する。なにが起こったのかわかっていないみたいだ。頭を左右に振って、現在位置を確認しているらしい。

「……おはよう」
あと数センチで顔がくつつくくらいの距離から、皮肉を込めて薫は笑って見せた。

すると、カヲルは目をこれ以上はないというくらい見開いて、一気に飛び起きた。飛びのいたというほうが表現はいいのだろうか。「洗面所借りる！」

言うなり、薫の顔も見ずに風呂場に入ってしまった。
この家は一応、トイレは別だが、洗面所と風呂場は一緒になっている。そこへカヲルは逃げ込むようにドアを閉めたのだ。

ザーっとシャワーの音が聞こえる。何をしているのだろうか、なかなか出てこない。

薫のほうも、自分の早い鼓動を抑えるのに必死だ。カヲルが出てくる前に落ち着きを取り戻さねば。何度か深呼吸をした。しばらくすると、なんとか心臓がゆっくりになつていくのを感じた。

ふう。びっくりした。もう、カヲルくん寝相が悪いよ。

しばらく時間が経ち、やっとドアが開いたと思つたら、頭ずぶ濡れのカヲルが顔を出した。

顔を洗っているくらいだと思つたのに。

薫は急いでタオルを取り出し、カヲルの頭に被せた。そして、わしゃわしゃと髪の毛の水分を取り払う。

「悪かった」

タオルの下で俯き、うな垂れているカヲルがいる。薫は髪を擦りながら、ため息まじりに笑つてみせた。

「いいよ。寝ている時の無意識の状態だもんね。しかたないよ」

「……いや……」

ぼそりとカヲルが何か呟いたが、薫はそれを聞き逃してしまった。「え？　なんか言つた？」

カヲルは頭を振つて、それを否定する。そしてタオルを取ると薫の顔をじつと見た。多少さっきの照れがあるのか、すぐに目を逸らしてしまつたが。

「いいや、なんでもない。それより野菜、ありがとう。そろそろ帰る」

そしてカヲルは野菜を手に、早々と薫の部屋を出た。

一人になつた自分の部屋。それがなんだが寂しく見える。ガランとしているように見える。

カヲルのせいだ。

薫は一気に脱力し、ベッドの上に倒れこんだ。

さつきまで居たカヲルのぬくもりが残っている。なんだというのだろう。この気持ちは。

寂しい、というか、空っぽになつたような気持ち。

今まで薫は彼氏がいなかったということはない、高校生のときに一度だけ付き合った人はいる。けども、そのときの感情とは全然違う。以前はドキドキしっぱなしで、何をしゃべっていいのか全くわからなかったり、一緒にいるだけで心臓が破裂しそうだった。だが、カヲルと一緒にいて全然緊張したりしない。まあ、さっきみたいな事があると胸がきゅんとしてしまうが、普段にいたっては居て当然のような、安心感すら感じる。

一体なんだというのか。ああ、もう全くわからないよ。

カヲルは幼馴染。だからかもしれない。

薫は布団を身体にぐるぐる巻きつけた。するとカヲルの香りが残っていた。それを肺にいっぱい吸い込んで、薫は目を瞑った。

3 現れた客人

橘晴香は、足取りも重く、駅の改札に向かって階段を登っていた。今日はいつもよりもさらに身体が重い。言う事をきかない。脚に鉛がついているようだ。それに頭の中が痺れるように痛い。

きつと「頭の奥が痺れるように痛い」という表現は、誰もわかってくれないだろう。現に、さっきまでいた病院の先生も理解に苦しんでいた。

専門家のくせに。患者の気持ちが変わらないのか。

意識が朦朧としている。薬のせいか、病気のせいか。それすらも分からない。

だからか、改札で男の人とぶつかっても、リアクションが取れなかった。

すみません。の一言が言えない。

晴香は、ゆっくり顔を上げた。目の焦点があわない。だが、背の高い男の人というのは認識できた。ペこりとおじぎをすると、晴香は家に帰るための、電車のホームに降りた。

ここは普通電車しか通らないので、しばらく待たないといけない。ホームのベンチに腰をかける。

晴香は、重度の鬱病だ。今まで毎週通っている心療内科で診察を受けていた。

「鬱な気分」と「鬱病」の違いはなんだろうか。

鬱な気分が続いたり、やる気や、集中力が無くなる状態が二週間以上続けば「鬱病」だと言われている。軽度の鬱病だと、薬の投薬などで回復する場合がある。

晴香は重度の鬱病と診断された。もう三年もこの状態が続いている。薬である程度気分が向上する日もあれば、一日何もできない日もある。さらには、自分のコントロールが出来ないので、言動も荒

くなったりする。この状態になって友人がほとんど離れていってしまつた。もちろん働く事など、今は出来ない。実家で大人しく過ごす日々だ。

毎週心療内科に通つていても、医者には「最近どうですか？」と聞いた後、いつもの薬を出す程度だ。これで向上するとは、どうしても思えない。

晴香はぼうつとホームを見ながら、ここから飛び降りたらどうなるかな。と考へてみる。一応親は悲しんでくれるだろう。だが、他は？ 数人顔が浮かんだが、その程度だ。

私、消えてもいいかしら？

だが、その勇氣はない。この重い頭と身体を引きずつて生きるしかない。

ふと我に返つてみると、横に男性が立っていた。服装や髪型で、さっきの男性だと、気が付く。その彼は晴香に微かに触れるくらい近くにいた。それを今まで気が付かなかつた。

「無理するな」

その男性は、まっすぐ線路のほうを向きながら、そう言った。こちらを向いていないので、自分に言った言葉だとは、最初は判らなかつた。

だが、このホームには、晴香と大学生と思われるその男性二人だけだ。パーマのようなくなるくるの黒髪の男の人。

「心を無意識に押さえつけてしまつて苦しいんだ。吐き出し方も忘れてしまつたかもしれぬが、心は叫んでいる。もっと自由に生きていい」

そう言つと、黙つてしまつた。

言葉がふわふわ聞こえて脳に入ってくるのに時間がかかつたが、やつと頭が理解、解読した。

じわじわと言葉が心に染みてくる。すると同時に堰を切つたよう

に涙が溢れてきた。

どうして、この人は私の事をわかっているの？

どうして、私の言ってもらいたかった言葉を知っているの？

涙が止まらない。

その涙は悲しみの涙ではなかった。やっと理解してもらえた。という安堵の涙だ。病院の先生も言ってくれない、本当に知りたかった言葉。

彼は泣いている晴香が向かいのホームから見えないように、立っ
てくれていた。

思いきり泣いたのは、久し振りの気がする。泣き方も忘れていた。晴香はしばらく泣き続けていたが、やがてすすり泣きに変わり、
すすり泣きとした気分で顔をあげた。

彼は居なくなっていた。

一体、誰だったのだろうかと周りを見たが、全く気配さえない。

この近くの学生さんだろうか。

やがて、ホームに電車が到着した。晴香は男の人を捜すのを諦めると、今までに無い軽やかな足取りで電車に乗った。こんなに心が
軽くなったのは久し振りの気がする。

知らない彼に感謝をした。

バタバタと食堂の中を走っているのは、素子だ。遠目からでも分かる。私を捜しているのだな。

食堂でコーヒーを飲んでいた薫は、友人が自分を見つけるのを待ちながら、本を読んでいた。この間、カヲルが読んでいた本だ。やつぱり、今の私には理解が難しい。簡単な専門用語などは判るが、その程度だ。辞書を片手に読まなければわからない。

専門外のカヲルがすすらすらと読んでいるのに……。もつと勉強が必要だな。

諦めて本を閉じた時に、素子が薫を見つけた。急いで駆け寄ってくる。

「すつごい話があるんだけど！」

息を切らせながらも、またもやキラキラした目で薫を見ている。

……これは、例の噂話のネタか。薫は直感し、うんざりした。

今度は何を言うのだろうか。数日前カヲルが家に来たのは皆にばれていないはずだし、よもやその時あった出来事の内容ではないだろう。あれのおかげで、カヲルに妙に会いづらくなってしまった。気にしちゃいけないのは、わかっているけど……。

素子は走り回った為か、それとも興奮しているせいか、頬が高潮している。よほどの事だろうか。

彼女はごくんと唾を飲み込むと、声を潜めるように（全然潜まっていないが）話し出した。

「槇野さんが、女の人を泣かせているところ見ちゃった！」

え。

薫の頭の中が、一瞬硬直した。

目撃したのは、素子本人だったという。

「昨日、電車待ってたらさ、向かいのホームに槇野さんと、年上の女の人が並んでいて、突然女の人が泣き出したんだよね。びっくりしちゃった。でも槇野さん無表情でさー。なんだろ。別れ話とかかな？」

別れ話とかかなと推測しているのに、素子の表情は無邪気に笑顔だ。なんて無責任な笑顔なんでしょうね。

「……それ、何か会話してたの？」

「うーん、槇野さんがぼつりぼつりって二、三言言って、女の方は何もしゃべってなかった。しんどそうに、ベンチに座っていたよ。」

素晴らしい観察力です。薫は心の中で拍手をした。

カヲルから彼女が居るといふ話は聞いたことがない。まあ、聞いたことがないだけで、実は居たのかもしれないけど……。別れ話？最近眠れないとは言っていたが、その事なのだろうか。

薫の心臓は何故か自分の意思とは裏腹に、早鐘のようにドキドキしている。これは何に對してのドキドキなのだろうか。

彼女が居るといふことに対して？ それとも別れ話という事に？

カヲルのイメージが今までのものと全く違う風に見えてしまう。だって、あんなにカッコいいのなら、彼女いても当たり前だよな。

薫の顔が曇つたのを、素子は見のがさなかった。

「薫も知らないんだ。でも、あんなに否定していたのにその表情って事は、薫もまんざらじゃないんだね」

その言葉に薫はムキになった。いくら友人でもその言い方は無いと思う。

「違うよ！ 女の人の事は私も知らないよ。だって毎日一緒にいるわけじゃないんだから！」

頭の中がぐるぐるする。駄目だ。今はなんか変な事を言っちゃいそうだな。とりあえずこの場を離れなきゃ。

薫は素子を押しつけて立ち上がった。すると、背後から弱々しい女の人の声が聞こえてきた。思わず振り向く。

「二宮…薫さん…ですか？」

見た事がない女の人がそこに居た。

女の人は、橘晴香と名乗った。長い髪の綺麗な人だ。

「あの、あなたに会えば、槇野くんって人に会えるって聞いたのですが……」

素子が薫の着ていたデニムジャケットの袖を引っ張る。そして目で訴えている。

この人だ！と。

「どうして、私に聞いてこられたのですか？」

薫と晴香は一緒に図書室までの道を歩いている。構内の樹はだんだん黄色みを帯びてきて、秋が本格的に来たのだと教えてくれている。

彼女は、骨まで見えてしまいそうな細い体をしていた。目はどこを見ているのか分からない。そしておどおどとした態度。まるで、何かに怯えているように。

薫たちよりも六歳年上と言ったが、全然そんな風にはみえない。学生と言っても、違和感がないだろう。

彼女はなんだか全てがぎこちなかった。しゃべり方も、動きも、歩き方も。

もしかして、と薫は思った。

「えっと、くるくるの、髪型をした、背の高い、切れ長の目をした男の人を捜している、と、聞いたら、今の時間はもう帰ったか、二宮薫さんって人に聞けば、判るって言われたもので。あ、くるくるの髪型って言ったら、槇野くんじゃないか、って言われたので」

一体誰が私の名前を出したのだろうか。まあ、変な噂が流れているから、すぐ名前がでたんだろうけど……。

しかし、その晴香に薫を教えた人は確かにに的を得ている。

この時間は確かにカヲルは図書室の準備室に籠っていて、それを知っているのは私くらいだろうから。

しかし、本当にこの人が探しているのはあのカヲルなのだろうか。パーマをあてた男子など、学内では山ほどいるというのに。だが、昨日の素子の証言からすると、当たっているのだろう。

もやもや、する。

彼女は特に何も言うでもなく、薫について来ている。

薫は彼女について別の興味が湧いていた。興味と言ったら失礼だが、何か精神疾患を患っているのではないか。

うつろな目や、ぎこちない動きはその症例と似かよっている。心と身体がバラバラなんだ。

だが、薫はそれを聞くでもなく、図書室の中の準備室まで彼女を案内した。

コンコンとノックをしてから、入った。

中はやっぱり薄暗い。奥にカヲルがいる。今日は本をアイマスクにして眠っていた。

この間の出来事や、今日のこの話で、頭の中がごっちゃになっていて、カヲルと顔を合わせづらい。だが、今のこの状況ではそれも言っていられないだろう。

入口近辺に晴香を待たせ、薫はつかつかとカヲルへと近づく。

そして、本をひったくると、耳元で大声で叫んだ。

「カヲルくん！！ お客さん！！！！」

びくつとカヲルが、身体を仰け反らせた。

「……びっくりさせんなよ」

眩しそつに、目を擦りながら起き上がる。そして薫を見、それから別の気配を察したのか、入口の晴香に目をやる。

「あ」

第一声はそれだった。他にないのか。この男は。

晴香は、目的の人物がカラルだったようで、顔を赤らめながらお辞儀をした。

3 現れた客人

「……本当に、心が晴れた気がしたんです」

カヲルはその言葉に、照れを隠すように鼻を掻いた。

「おや、私にはそんな表情みせてくれた事ないよね？」

「あれは本来、医者が言うべき言葉だ。あそこの病院は良くない。ちゃんとカウンセリングがある病院に転院したほうがいい」

今は一つしかない折りたたみ椅子に晴香が座り、薫は間に立ちながら話を聞いていた。

「やっぱり、精神疾患の病気だったんだ。と薫は納得する。」

「どうして、私の事、わかったんですか。あなたとは会った事もないはずなのに」

カヲルはあの能力を使ったのか。いつもなら遮断しているはずなのに。だが、カヲルはその能力の事は言葉にださなかった。

「見れば、わかりました。僕、心理学部でして、精神学のほうも勉強を始めたんです。その症例にそっくりでした。彼女もその勉強をしているから、わかったんじゃないかな？」

何を嘘っぱちなことを言っているんだ。カヲルは法学部。心理学の勉強なんかしていないはずだ。それに何故私にまで話をふっかけてきたのだろう。

「え、あ、ま、まあ」

突然話を振られたので、微妙な受け答えしかできなかった。

確かにその症例にぴったりだ。とは思っていた。だが、その症例に見合った治療法までは私はまだ知らない。しどろもどろになってみるとカヲルが何か目で訴えている。（今日はこんなことばかりだ）『都合よく話を合わせる』そう言っている。

そうか、カヲルは彼女の心の中を言い当てたが、肝心の精神学の知識は専門外だ。だから勉強をしている薫に話をふつたのだ。

そう納得すると、落ち着いて薫は晴香に向き合った。

「私もまだ勉強をはじめたばかりなんです。でも確かに今の晴香さんの状態は症例に近いものだと思います」

晴香は、少し悲しそうな顔をした。俯き、爪を噛む。おそらく彼女の癖なのだろう。親指の爪は深爪になっていた。それがなんだか痛々しくて、薫も悲しい気分になる。

「そうなんですか、……外見からでも判っちゃうんだね」

「もちろん、私や彼のように専門的に勉強しているから判るわけで、全ての人が晴香さんの病気をわかるとは思わないですよ」

慌てるように、薫は思わずフォローした。この病気を隠したい人は沢山いる。完治したとしても、その病気になったという過去を隠したがる人は多い。やはり、だいぶ認知はされてきた病気だが、まだ偏見は残っているのだ。

「これらは僕が推薦する病院です。H・Pもあるから、自分に合った病院を搜してみてもいいかがですか？」

そう言うと、カヲルはノートの一ページを引き裂き、晴香に渡した。晴香はそれに目を落とす。薫も一緒に覗き込むと三件ほどの病院が書かれていた。

「自分に合った病院を搜すほど、大変な事はないですけどね」

カヲルが苦笑しながら言う。ここ数年、心療内科や精神科が増えしてきたとはいえ、自分に合った病院を搜すのは至難の技だ。晴香が言っていたように、薬だけ渡されて終わり。というのも少なくない。都内というのに、カヲルが推薦してきたのも三件のみという、そんな現状に薫は悲しくなる。

晴香はその紙を宝物かのように大切に折りたたみ、持っていたカバンの中に入れた。

カヲルと晴香は、その後、軽く会話をして、晴香は立ち上がった。「本当にありがとうございます。ちゃんと病院搜してみます」

ペこりとお辞儀をして、部屋を出ようとする。するとカヲルはまた薫に目線で指令を出してきた。

「あ、お送りしますよ」

どうして、私が指令されないといけないのかなあ、と思いつつ、薫も晴香ともう少し話をしてみたいと考えていたので、走って晴香を追いかけた。

晴香は構内のベンチに腰掛けていた。薫を見つけると、ゆっくりと微笑んだ。

「いっぱい話したの、久し振りで、……ちょっと疲れちゃって」
そう言うと、空を見上げた。晴香の横に座った薫もつられて空を見上げる。

「もう、秋なんだ。いつの間にか季節が変わっていたんだな」
しばらくの沈黙があった。薫は無理に声をかけないようにした。

「……私、もうこの病気になって、三年経つんですよ」
薫はその年月の長さに驚いて晴香の方に向いた。その視線に気付いたのか、晴香も空から目を落とし、薫の方に向き直った。

「……最初は何がなんだか分からなかった。他人の言っている意味がわからない。頭の中がモヤにかかったように、思考がはつきりしない。……何かわからないけど、すごく悲しい。泣きたい。消えない。心と身体が、歯車が外れたように思い通りに動かない……」

晴香は自分の両手のひらを広げた。手が震えていた。

「ずっと独りだと思ってた。両親は優しいけど、私のこの感覚までわかるわけじゃないし。病院に通っても、薬をもらっても、気分のいい日もあるけど、身体が鉛のように重くて、頭の中がぼうつとしてね。もう、病気なのか、薬の副作用のせいなのか、それすら分からなくなっちゃって」

震える手をぎゅっと握り締めて、晴香は薫のほうを見た。

「そんな感じで、毎日過ごしてたら、昨日カヲルくんに言葉をもらって。「心を押さえつけている、無理するな」って言われたの。ああ、そうだったんだって……。私、心押さえつけていたんだって、その時やっと初めて自分の心の状態に気が付いたの」

カヲルはそんな事を言ったのか。そういえば、カヲルが晴香に何

を言ったのか聞いてなかった。

「初めて人に理解された気がしてね。それで今日お礼をしようと思つて来たのよ。あ、これ、お菓子。二人で食べて」

晴香は来た時からずつと持っていた紙袋に初めてそこで気付き、薫に渡した。

「え、私に渡されても……」

「だって恋人同士でしょ？ 仲良く食べてね」

彼女は楽しそうに言うと、ふらつと立ち上がった。なんだかその姿が、秋の精のように見えた。まるでこのまま消えてしまいそうな気がする。

一歩遅れて、薫は立ち上がる。

二人は無言のまま、門まで歩きつづけた。晴香は楽しそうに落ち葉を踏みしめていた。

「あの、病院、いいところ見つかるといいですね」

門の前で薫は言った。晴香は振り返り、ぎこちない笑顔返す。でも、これが今の彼女の精一杯の笑顔だろう。

「ありがとう。お友達ができたみたいで、楽しかった」

はらはらと落ち葉が彼女の顔をさえぎるように、舞い落ちてきた。いつか、この落ち葉ではなく、新しい花が、彼女に芽吹きますように。

薫は準備室に戻ってきた。軽くドアを叩いて中に入る。

カヲルはまた机の上に脚をかけて、いつもの体勢で寝ていた。

「なんだ、私に見送れって言うから、行ってきたのに。また寝てる。お菓子もらったんだけど、一人で食べよ」

独り言のように言ってみた。すると、カヲルは顔を覆っていた本を取り除き、姿勢を正した。

「お菓子か。甘いもの欲しかったんだよな」

全く、どっかの犬みたい。

薫は奥へ行くと、カヲルの足台にいつもさされている机を持っていたティッシュで綺麗に拭き、その上にお菓子の箱を置いた。

中を開いてみると、有名なお菓子屋さんの詰め合わせだった。

「お礼につて。こんな立派なの要らないのにね」

言ってみたが、言葉を掛けたのは、カヲルだ。私が言う立場じゃないか。

カヲルは早速袋詰されたクッキーを広げ、口に運んでいる。

「おまえも食べるよ」

そう言われると、食べたくなくなってきた。遠慮がちに、一つ、手にとる。

簡単なお菓子パーティーみたいだ。

最初は遠慮していた薫だが、あまりの美味しさに、もうひとつ、もうひとつと手にとってしまう。その様子を見ていたカヲルが、ほそつと言った。

「あの姉さんを助けたいなんて、思うなよ」

どきつとした。ちょっと一瞬考えていたのだ。カヲルは薫の顔を下から覗き込むように、改めて確認をする。

「あの症状は俺たち素人じゃ、どうしようもない。もう専門医に任せたほうがいいんだよ」

喉を詰まらせるかのように、薫は頷いた。

「うん。……わかってる。私……たちじゃ、手に負えないって事は」
彼女は、前回の綾のように鬱っぽい、ではない。もう心も身体もバラバラになって、それを繋ぎ戻すするには、また長い年月がかかるだろう。

「じゃあ、どうしてカヲルくんは、晴香さんに言葉をかけたの？」
ムキになって、カヲルに聞き返してみた。カヲルはどきりとした表情を浮かべ、気まずそうな顔をする。

「だって、カヲルくん、他人の心は読まないって言っていたのに、晴香さんの心は読んだんだよね？」

なにか嫉妬みたいな気分になる。そんな自分がわからなかった。

カヲルはぶいつと顔を背けると、ぼそりと呟いた。

「うつったんだよ」

「え？」

意味がわからなくて、薫は聞き返す。

「誰かさんの、おせっかいがうつったんだよ」

カヲルはお菓子を端に避けて、またいつもの姿勢に戻る。そして身体ごと顔を背ける。

「誰かさんって？」

それって、もしかして私？

「どんくさくて、鈍感で、自分自身も一杯いっぱいなくせに、他人も放っておけない、どっかの誰かさんだ」

散々な言われようだ。だけど、なんか嬉しくなった。そうしたら悪乗りしたくなってきた。

「えー？ それ、誰？」

カヲルににじり寄っていく。

名前を呼んでくれるまで、嫌がらせしてやる。

「五月蠅いな。さらにやかましい奴って言う言葉も足してやる！」

4 遠い過去の記憶

ぼちゃん、と雫が垂れてきた。

「あ、いけない」

本の上にその雫が落ちて、文字がにじんだ。薫は急いで乾いたタオルで水を拭いたが、これは、あとで皺になるだろう。

お風呂の湯船の中に薫はいた。薫はお風呂の中で本を読むのが好きだ。本はしわしわになってしまいが、もう読まなくなった本を改めて読んだり、古本だったりだから、薫は気にしない。とっても大切なやつは別だが。

ふうつと一息ついて、本を外に置いた。今日は色々な事があつたな、と思い返してみる。さっき読んでいたのも、昔に購入した初心者向けの心理学の本だった。

薫が心理学を専攻したのは、中学生の出来事がきっかけだった。イジメにあつて、リストカットをして…うつに入り込んでしまった自分。そして、乗り越えてきた自分。綾みたいな子を少しでも癒してあげたい、という思いから心理学を勉強し始めたのだ。

そして、今日、晴香に出会った。

なんて難しい事なのだろうか、心を治すということとは。

改めて実感した。

カヲルに言われなくてもわかつていた。私なんかでは彼女を癒してあげる事など出来ない。もっと勉強が必要だ。心の病は単純ではないのだ。

薫は頭を切り替えて、湯船に手足を伸ばした。晴香はすごく細かったな……。カヲルくんも細い子が好きなのかな。なんて考えてみた。そして、私馬鹿だな。と自嘲する。

まったく、変な噂のせいで、頭の中がカヲルで一杯になっている。噂に自分が惑わされてどうするんだ。

そう思うと、薫は湯船から出た。汗もいっぱい出た。変な考えも

一緒に出て行け。

今日はゆっくり、眠ろう。

薫はシャワーの蛇口を捻る。

薫は風呂からあがると、ベッドの脇に置いてあるサイドテーブルの上のキャンドルに火を点す。同時に部屋の電気を消す。暖かい小さな明かりが、薫の小さな部屋を照らす。

ベッドの上に座り、壁を背もたれにして天井を見上げる。ゆらゆらと、キャンドルの炎が幻想的な模様をつくり上げている。こうしていると、心が落ち着く。

頭の中を真っ白にしたかったが、なかなかそれは難しい。何も考えないようにすればするほど、人は余計なものまで考えてしまうものだ。

カラルのニヤニヤと笑った時の顔が浮かんだ。一瞬、イラッとする。

このやろう、消える。

それを追い払うと今度は、この間のこの部屋で起きた出来事が浮かんできてしまった。改めて思い返してしまって、顔がカーツと熱くなるのを感じた。

ま、待て。落ち着け。私。

落ち着こうとして、キャンドルを点してポーっとしょっとしているのに、逆効果になってどうする。

でも、あれは、ねえ。不可抗力というものですよね？

何に對してか分からないが、薫は弁明する。

カラルくん、思わせぶりの態度が多いから困るんだよ。

もうカラルと再会してから半年が経つんだ。最初のカラルは、けだるそうな目で私を見てたな。投げやりな態度のくせに、優しくかった。私が夢から覚めなくなってしまうたあの時、ふたりで夢の世界を旅した。

会って間もない時でも、顔を鷲づかみにして説教するという事が

あつた。いくらなんでも、あれは無いだろ。

薫は思い出して苦笑した。あれはストーカーの影で私が怯えた時だった。おかげで、怖い思いも吹っ飛んじやったっけ。

施設に行った時は、人が寝ている時に背中を向けて寝ているし、ね。

あの出来事の時は初めてカヲルの弱いところを見た。人に決して弱みを見せない彼が、はじめて見せた姿。

思い返してみれば、此処しばらく、ずっと彼と一緒にいた気がする。

薫の心を反映するかのように、キャンドルはゆらゆらと幻想的な灯りを点しつづけている。

+ + +

眠りに落ちると、そこは、淡い、世界だった。

だが、まるでそれは昔の写真を放置しておく、所々色が消えてしまうように、虫食いのような世界だった。そこは若干セピアがかっている場所もあれば、鮮明に色がくつきりしているところもある。生垣の植物などがそつだ。異様なほど、鮮やかな緑が目まぶしい。親子が居た。

父と母らしき二人は、少年に語りかけている。

「ここで、待っていてね」

少年は、無表情に頷くだけだった。そして、後ろにある石の階段に腰掛ける。

その夢の中では薫は蝶のような不安定な存在としてその光景を見ている。少年の寂しそうな背中が印象的だった。

空は夕暮れに差し掛かってきた。両親は帰ってこない。

やがて、世界が闇になる。少年はその場を微動だにしなかったが、両親は戻ってこなかった。

その場がとうとう漆黒の間になると場所が転換され、少年は四隅の奥で、身体を縮こませている姿が映りだされた。

少年の周りに大人や、子供大勢が取り囲んでいる。彼らは口々に何かを呟いている。

「気持ち悪い」

「怖い、なにこの子」

「不気味な奴」

「人の気持ちをわかったような風にしゃがって」

次々に少年に浴びせ掛ける、悪意、悪口。薫は止めてあげて！

と叫ぼうとするが、声が出ない。少年は耳を塞ぐ。小さな身体をさらに小さくさせて、その声から逃げようとする。

声は止まない。

誰か、助けてあげて…！

薫が目を覚ました時に、自分が涙を流しているのに気付いた。

なんて、悲しい夢だったのだろうか。あの少年は誰なのか。また私は誰かの夢に入り込んでしまったのだろうか。

薫は体を起こした。そして、気付く。

あれはカヲルくん？

4 遠い過去の記憶

空はどんよりと厚い雲が覆っている。今日は雨が降りそうだ。いつもの秋の暖かさは消え、冷たい風が薫の体に吹き付ける。その中身を強張らせながら大学の食堂に向かっていた。

「やっぱ、こういう日は食堂で温かいごはんだよなー」

今日も元気な素子が、向かいでうどんを食べている。薫も苦笑いしながら、自分の作ってきた弁当を食べている。

食欲がないな……。

夢の事も気になって、薫は口数が少ない。そのフォローをしようかというように、素子はよくしゃべっている。半分も耳に入っていないが。

すると、素子の横から声が聞こえた。

「ここ、いいか？」

はっと二人が見上げると、そこには榎野カヲルがランチ片手に立っていた。

「珍しいね」

薫はカヲルに言った。カヲルの横で素子が硬直している。なんともいつても昨年の男前の最優秀賞だ。噂話では簡単に榎野くん、榎野くん、と言ってはいたが、本人を目の前にするとは思っていなかったよ。カチンコチンになっている。その姿を見て薫は笑った。

ま、私もその話を先に聞いていたら、こんなに気軽にしゃべりかけられなかったかもね。

「俺だって、腹くらい減るさ」

素子を気にする様子もなく、カヲルはランチを食べている。薫はこっそりカヲルの顔を見た。やはり、目の下にクマが出来ていて、だるそうにしていた。やはり、あの夢はカヲルだったのか、と薫は確信にかわる。

「弁当、いらないのか。卵焼きもらうぞ」

ひょいっと薫の弁当の中に入っていた卵焼きを箸で取り上げた。さすがカヲル。薫は卵料理が一番得意ということを知っている。

その様子を見ていた素子が、いそいそと立ち上がった。

「私、先に帰ってるねえー」

語尾があがっているということは、あとはお二人ごゆつくりという意味が含まれているな。後で何を言われるか、考えるのも面倒だ……もう諦めよう。

「なあ、午後講義あるのか？」

素子のもくろみをよそに、カヲルはちょうど邪魔な相手がいなくなった。という感じで薫に話し掛ける。

「え、ううん。今日は午前だけ。これから帰るよ」

「探している本があるんだが、一緒に探してくれないか」

予想もしていなかった言葉である。あれだけ本を読んでいるのに、さらに探している本があるとは。それに薫と一緒に探したいとは。

もう、夢の事は忘れよう。

薫は考えた。カヲルも触れて欲しくなさそうだし。

そして、うん、と笑顔でかえした。

「雨、降りそうだねえ」

薫は空を見上げながら呟いた。

「そんな口開けながら、上を向くなよ。アホ面丸出した」

カヲルに言われて、むっとしながら顔を正面に向けた。今二人は中庭を突っ切って、学校から出ようとしている。どうやらカヲルは新宿の大きな本屋に行くつもりらしい。何の本を探しているのだろうか。今ならネットでも買えるけど、すぐに手に入れたいみたいだ。そんな時、カヲルの同級生らしき男子が声をかけてきた。

「よう、槇野。可愛い女の子連れてデートかよ。相変わらず薄気味

悪い奴のくせに、女にだけはモテるよな」

どう考えても好意的な口調ではない。さらに男は付け加える。

「二宮さん、そんな気持ち悪い奴なんかほっといて、俺らと遊ぼうぜ」

薫はぎよつとして、カヲルの後ろに隠れた。カヲルは無表情のままその雑言を聞いている。

どうして、私の名前を知っているの？

「カヲルくん……」

そうつと、カヲルの顔を見た。無表情に見えるが、顔に怒りの表情が現れたのを薫は見逃さなかった。

「おまえの、同じ高校の奴からも聞いたぜ。あいつは人の考えがわかるみたいで、気持ちが悪いつて言ってたな」

薫はその言葉で、もう我慢ができなかった。

「なんにも知らないのに、何て事言うの！」

薫はその名前もしらない男子に食って掛かる。それをカヲルが抑えた。

「どうして、カヲルくん。人の気持ちわからないこんな人！ 酷すぎるよ！」

男はゲタゲタと笑っている。カヲルは聞こえなかったように、その場から離れる。

「カヲルくん！」

「放っておけ。気にするな」

そう言うカヲルはスタスタと歩調を速める。

気にするな？ だって一番気にしているのはカヲルくんじゃない。そんな目をしているのに。

「気になるよ！ カヲルくんをあんな風に言うなんて。気にしているのはカヲルくんでしょ。夢にまで見て、そんなに目の下にクマまで作って……！」

ぽつり、と水滴が落ちてきた。

それは一粒、ふた粒と数を増やしていき、やがて本格的な雨とな

った。

薫の言葉を聞き流していたカヲルだったが、夢という言葉で反応した。足を止めて、振り返った。

「夢を見たのか…？ 俺の夢を……」

予想以上な真剣な顔に、薫は戸惑った。だが、こくと頷く。

「小さいカヲルくん、大勢の人たちから取り囲まれて、悪口を言われて……。あのカヲルくんは耳を塞いで泣いていた！ カヲルくんだって、今だって同じ気持ちでしょ！」

「うるさい！！」

カヲルが怒鳴った。初めてだ。カヲルが怒鳴るほど感情を爆発させている。

冷たい雨が二人を隔てる。

カヲルは自嘲的に薫に向かって笑う。引きつった笑い。

「夢を見られるのが、こんなに嫌だとは思わなかったな。だけど、どうしたらいい？ これは俺がもって生まれたもので、あんな言葉はいつでももついて回ってくる。解決法なんてないんだよ」

薫は頭をぶんぶん振った。

そんな卑下した気持ちにならないで！

「カヲルくんの能力は、晴香さんみたいな人たちを助ける、大切な力だよ。皆の誤解を解く方法だってきつと……」

「そんなもん、ねえよ。今日は雨も降ってきたし本を探すのを諦める。さつさと家帰んな」

そう言うのと、カヲルは踵を返して学校の門を出て行った。

薫はその場で立ち尽くして、泣いた。

なんの涙だろう？ これは。

冷たい、凍えそうな雨が薫を襲う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034u/>

心拍数 < 深海魚3 >

2011年7月30日03時21分発行